

P2-029

重症心身障害児の経管栄養実施時の左側臥位の有用性の検討

古藤 雄大、乾 ひより、下屋 亜友美、
山本 彩加

大阪母子医療センター 看護部

【目的】

胃瘻栄養または経鼻経管栄養の実施について、基本的な看護技術では右側臥位で行う事を推奨している。しかし近年、右側臥位と比較して、左側臥位の方が注入による胃食道逆流症（Gastroesophageal Reflux Disease：GERD）や一過性下部食道括約筋弛緩のリスクが低いという報告がされている。そのため、GERD や嘔吐による誤嚥性肺炎を繰り返す患者においては、注入時の左側臥位が有効であると考えられる。今回、喘息発作から頻回に嘔吐し、誤嚥性肺炎を繰り返す患者に対して、左側臥位を実施した症例を経験したので報告する。

【症例】

自己体位交換のできない10歳代の重症心身障害児。胃瘻からの経管栄養法を4回/日、エネーボ使用している。誤嚥性肺炎による入院を繰り返している。

【方法】

1)2017年10月11日～2017年10月16日16時、ギャッチアップ30度右側臥位で経管栄養を注入した。2)2017年10月16日21時、10月17日、10月31日～2017年11月3日、ギャッチアップ30度左側臥位で経管栄養を注入した。注入開始から終了後1時間までの酸素飽和度の90%以下の低下の有無、嘔吐の有無、咳き込みの有無についてそれぞれ1注入当たりの出現回数を比較した。

【結果】

調査の結果、注入開始から終了後1時間の酸素飽和度90%以下の低下、嘔吐、咳き込みの1回注入当たりの出現率は、右側臥位で0.36、0.14、0.41、左側臥位で0.21、0.03、0.34であった。また、医学的診断のために実施された pH モニターの結果では、左右の明らかな差は認められなかった。

【考察】

先行研究では注入後に右側臥位を取ることでGERDの発生率が高まることを報告している。そのため、注入時の体位は右側臥位より左側臥位の方が安全であると考えられる。また、注入物の胃排出に関しては右側臥位の胃排出が早かったものの、左側臥位でも日常生活上で問題となるほどの遅れはないことが明らかとなっている。今回の対象者においても食道内の逆流は体位による変化はなく、右側臥位に比べて左側臥位の方が嘔吐の回数が少ないことから左側臥位による経管栄養法は検討に値する。

P2-030

在宅療養児を亡くした母親がうけた訪問看護師からのグリーフケア

久保 恭子¹、坂口 由紀子²、田崎 知恵子³、
宍戸 路佳⁴、佐鹿 孝子⁵¹東京医療保健大学東が丘立川看護学部²日本医療科学大学³日本医療保健大学⁴西武文理大学⁵前埼玉医科大学

【目的】

在宅療養にて、訪問看護を受けた後、子どもを亡くした母親への訪問看護師のグリーフケアを母親の視点から明らかにする。

【研究方法】

期間・研究方法：2016年5月から2018年1月・半構造的インタビュー調査。分析方法：質的帰納的分析。研究対象者：子どもを亡くした母親5名。倫理的配慮：所属機関の倫理委員会の承諾を得て実施した。

【結果】

子どもを亡くした母親のインタビューより、子どもの死後、訪問看護師からどのようなサポートがあったのかを焦点に分析をした。母親は子どもの死後、時間の感覚がなく、泣いて暮らすことが多い中、訪問看護師から【空虚感や孤立感を埋める手紙や電話】があり、また、【子どもの死を語れない親に付き合ってくれる】訪問看護師がいた。時間の経過と共に訪問看護師に【私も支えてもらっているという感覚】が芽生えていた。また、タイミングよく【子どもの死を語れるサポート団体等の紹介】があった。一方で、訪問看護師の支援に不満があると【私にはあわないサポートばかり紹介される】【子どもが亡くなると今までの人との絆が切れる】とより孤独感を感じている親もいた。さらに、訪問看護師より、カウンセリングを紹介された親は「今までの経過を知らない心理職に話しても、他人事で聞いている気がする」と話し、訪問看護師が【心理職よりも聞き上手な人の存在】であった。

【考察】

訪問看護師のグリーフケアは、子どもを亡くした母親を避けることなく連絡を取り、母親の空虚感や孤立感を埋めていた。また、時機を見て、家族の精神的なサポートとなる団体等の紹介をしており、新たなサポート体制への支援の構築へ移行していた。一方、母親は心理職等の新たなサポートよりも、訪問看護師に継続した支援を期待していることがわかる。先行研究によると、家族は支援する多職種が多すぎて疲れるという意見もあり、心理職が母親への支援に入るとは現実的ではないと推測する。子どもの死後、訪問看護師の支援に不満があると、孤立感を強める母親もいた。訪問看護師が母親にとって大きな頼りになる存在であり、子どもの死と共に、訪問看護師との関係が希薄になること、別の支援者へ移行することに心細さや戸惑いを感じる家族がいることを理解し、支援していくことが必要である。本調査は笹川記念保健協力財団の助成を受けたものである。